

諸外国における行政管理の実態把握に関する
調査研究報告書（概要版）

—IIAS 国際大会（チュニス大会）における
発表論文等の収集、分析・整理—

平成 30 年 10 月

一般財団法人 行政管理研究センター

本調査研究は、諸外国の行政管理の実態を調査するにあたり、行政管理に関する実務・学術を通じた国際非営利組織である国際行政学会（International Institute of Administrative Sciences: IIAS）チュニス大会（2018年6月25日～6月29日、於チュニジア共和国チュニス市）に参加し、同大会での報告論文を収集・分析したものである。

本大会のメインテーマは「統治システムの弾力性：努力、適応、維持（Strive, Adapt, Maintain: Resilience of Governance Systems）」である。社会情勢の変化に伴って、国民・市民の行政に対するニーズも様々に変化する。そうした変化に対して行政がどのようにして対応するのか、その対応をどのように維持し、発展させていくのか、さらには、国民や市民のさらなるニーズの変化に対してさらにどのように対応していくのか、こうした問題は常に行政を悩ませるものとなる。また、災害、政治的紛争、戦乱等、統治システム自体が崩壊してしまうような状況において、統治システムをどのように構築、維持し、行政サービスを提供していくのかは世界的な課題となっており、時宜にかなったテーマが設定されている。

本報告書においては、本大会において報告された論文の中から、我が国中央政府の行政管理に資すると考えられるものを中心に抽出し、その概要を取りまとめるとともに、それらの論文の傾向及び我が国の行政管理への示唆を取りまとめた。本報告において抽出した論文は以下のとおりである。

・「レジリエンス」（本大会メインテーマ）に関係するもの

1. 「レジリエンス倫理及び持続可能なガバナンス：包摂社会へ向けた問いかけ」
2. 「機能的なサブシステムの均衡化と人々のインクルージョン：ガバナンス・システムにより直面する課題についてのシステム理論的な観察」
3. 「有効な行政システムの中核としてのナショナル・レジリエンス・センターの設立と発展」
4. 「再生のための構造と手続き改革」

・行政管理に関するもの

5. 「公職の質—公務員の公的スキルに対する価値の視点」
6. 「官民パートナーシッププロジェクトの評価：単なるバリュー・フォー・マネーだけであるのか」
7. 「ドイツにおける道路インフラ PPP—なぜ F モデルと A モデルは失敗したか？」
8. 「イタリアにおける行政及び持続可能な開発のための 2030 アジェンダ—最善の措置に基づく行事について—」

・ガバナンスに関係するもの

9. 「ガバナンスの特質について—違背及び尊重—序論」

10. 「ガバナンス 4.0-システムインテグレーションは、トランザクションインテリジェンス、連携基盤、自動化された個別対応に影響を及ぼす」
11. 「参加型ガバナンスにおける市民の役割の変化—受動的サービス受給者から能動的サービスデザイナーへ」

上記に抽出した諸論文及び本大会の諸議論を踏まえ、本大会での報告内容等を以下に総括する。

本大会においては、統治システムのレジリエンスについて様々な報告がなされた。ここで関心の対象となったのは、急速に様々な形で変化を遂げる世界において、各国の統治システムがその変化にどのように対応しているのかについてである。

昨年度の IIAS エクサンプロヴァンス大会で話題となった移民・難民問題に限らず、行政を取り巻く環境は大きく変化している。こうした状況の中、国民・市民のニーズも様々な変化する中で、行政が対応していくことは容易ではない。我が国をはじめとする先進国においては、高齢化・高福祉化に伴う財政面負担の増大が大きな課題となっており、我が国においても「持続可能な社会保障」が議論となるなど、統治システムの維持は大きな課題となっている。さらに、IIAS の場には発展途上国の参加も多い。さらに、今回の開催国であるチュニジアのように、近年の政治変動で統治システムについて根本からの再構築を余儀なくされた国も多い。こうした国においては、様々な行政ニーズに対して何を優先し、何に対処しつつ国民・市民のニーズにこたえるかは、統治システムの安定にもつながる重要な問題となる。

なお、本大会では、メインテーマの他、伝統的な行政管理の手法や、近年の行政学及び行政運営に大きな影響を与えてきた NPM やその後の行政管理理論に関する論考、近年我が国でも話題となることの多いガバナンスに関する論考、さらには各国において個別の行政課題にどのように対処しているか等かについても様々なセッション及び公募セッションが届けられ、数多くの報告がなされた。NPM については、行政学研究の場では既に時代遅れのものとなりつつあり、その次の行政及び行政理論の在り方が模索されているが、現実の行政への行政理論の適用という面で考えると、まだまだ NPM に基づく行政運営の手法は根強く残っている。このように、理論だけの検討ではなく、理論が現実にもどのように適用されているかについて、研究者と実務家（各国政府関係者等）が同じ場所で双方の立場から議論できるという点は、IIAS の強みである。また、NPM に続く行政理論として注目されることが多いガバナンスをめぐる諸理論についても、理論とその実践についての事例が紹介された。本報告書では、これらについても数編取り上げて紹介した。メインテーマに限らず、こうした研究動向について国際学会等を通じて収集することの意義は大きい。